
何故つくった！？

河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何故つくった!?

【Nコード】

N1326M

【作者名】

河童

【あらすじ】

変な学校に入学した。その後は不明。
展開がよめる人は予知能力の才能があります。ぜひ試してみてください。
う。

ゆっくりよんでいてね!!

第一話 「人生」黒歴史（前書き）

前書いたやつ。間違えて短編で投稿してしまったので再投稿。

第一話 「人生」黒歴史」

昔から私はなんだか分からないものを作るのが好きだった。

そして後になって必ず「何でこんなものを作ったんだろう」と後悔をする。冷静になってみると現実なんて冷たいものだ。

小学三年生のころ、夏休み中千羽鶴をおって自由工作として提出した。先生が苦笑い交じりで褒めてくれたときに気づいた。自分がこんなことのために大事な夏休みを棒に振ったことを。

この事件以降、私は「黒歴史の塊」と友人に言われた。確かにそのとおりだ。

黒歴史といえば、私が一番多く黒歴史を作ったのは高校のころだろう。

あの学校に入らなければ少しはまともな人生を送れたはずだ。

私は今年高校生になった。ごく普通の高校生としてこれからは歩んでいくぞ、と意気込んでいる私はこの高校が普通ではないことに気づいてはいなかった。学校説明会で校長が「ここはごく普通の学校です」なんて言っている時点で普通の学校ではないことに気づくべきだった。普通の学校が「普通」を強調をするはずないだろ！アホか私は！あるいはバカだ！

今更嘆いてもしょうがない。まずはこの学校が普通ではないと感じた時の話をしよう。

あれは入学式が始まる直前だった。

入学式が行われる体育館には新入生が集まり、今か今かと始まりを待ち構えていた。私の所属することになったクラスのメンバーは

お互いに自己紹介をして初々しい雰囲気が出た。他のクラスの人も同じようなことをしている。

私はシャイだったため、恥ずかしくて周りに声をかけることができずにあたりを見回していた。すると黒いスーツを着た先生らしき人が一人急いで入ってきた。

その先生は迷うことなく私を見つけてこう言った。

「君、こんなところで一人で何をしているんだ！」

……一人？

私の頭に疑問が浮かぶ。

「えっ、だってここで入学式をやるんでしょ？」

「違う！ここは旧体育館だ。入学式は新体育館の方でもう始まっている！早く来なさい！」

えっ？だって皆いるのに何で？

疑問が次々に浮かびあがったが、ここは先生に従おうと思い席を立った。

すると、隣で座って自己紹介しあっていた女子生徒が私の腕を力強く握ってきた。

諸対面の人に腕をつかまれる覚えのない私はギョツと目を見開いて驚いた。それを見て女の子は冷たい声でこう言った。

「ドコヘイクノ？」

背筋が凍った。これは生きている人間が出せる声ではない。直感がそう伝える。

私は掴まれている腕を力いっぱい振り、掴んでいる手を解いて先生のところまで走った。先生は私が来るのを確認して足早でその場を立ち去る。

先生は何も言わずに私を連れて旧体育館を出た。何が何だかわからない私は先生の後を追っていた。

新体育館に向かっていく時、先生は一言言った。

「後もう少しで連れてかれるとこだったな」

後で聞いた話だが、この学校には心霊スポットがたくさんあるらしい。具体的な数字は教えてくれなかった。というよりも、誰も知らないらしい。

何だよこの学校……。

第一話 「人生」黒歴史」（後書き）

呼んで「叫びたい」「言いたい」ことがありましたら何でもいって
ください。

今回の一言

何故ホラーになった!!

第二話「ゆっくりしていいね!」(前書き)

バトルが書きたい

第二話「ゆつくりしていつてね！」

いままでのあらずじ
ホラーになっていた。

誰しも一回は何故この学校に入ったんだろう、と後悔することはあるはずだ。私だってある。入学式のあの事件が起きる前にだってそう考えたことはあった。

だが思う。それで転校まで考える人はほとんどいないだろう。入学式当日から壮大な恐怖体験をさせられてこのままこの学校で三年間過ごすなんて正気の沙汰じゃない。私は入学式が終わったあとすぐ家に帰り、このことを親に言おうとしたが「ただいま旅行中です」とテーブルにメモが張ってあった。親が育児放棄した瞬間を私は目のあたりにした。

というわけで転校できずにこのまま学校に残ることになった私に待ち構えていたのは平和な日々だった。

仲良くなるのに時間のかかった斉藤、ナンパに誘ってくれる谷口、熱血だが生徒思いの塩川先生、ヤンキーの風貌なのに心優しい松田、みんな良いやつばかりのこの学校を私は最悪な学校だと勘違いしていた。

入学式にたまたま悪いことがあっただけで判断してしまう自分を私はとても恥ずかしく思えた。

よしっこの学校で素敵な学園生活を送るぞ！

という夢を見たんだ。

夢はあれほど素敵だったのに現実はとても厳しい。

教室に入る前からいやな予感がする。

何でドアにお札が貼ってあるの？誰もいない廊下から人の足音やら何やらが聞こえてくるのはどうして？

昨日の事件で学校に行く気が乗らず、少し遅刻してやってきた私に待ち構えていたのは怪奇現象のオンパレードだった。階段が一段どころか一階増えていたり、トイレから青白い手が伸びていたりして、この学校の印象が全てオカルトになってしまいそうだった。いや、すでになっているが、これはあまりにも奇怪すぎる。

私は頭を抱えて教室の前でたたずんでいた。

「やっぱり行くしかないよね……」

ようやく決心した私はドアの冷たい取っ手に手をかけた。そして教室へと世界が広がっていく。

「ゆっくりしていつてね！」

ドアを開けた目の前にぽっちやりとした可愛らしい生首がいた。

おまけ

私「この学校には何故幽霊がいるの？」

先生「……理由が多すぎる」

私「……ああ、そうですか」

第二話「ゆっくりして行ってね!」(後書き)

何か質問がありましたら遠慮なく言っ
て下さい。
自分で自分に質問したいくらいです。

今回の一言

何故先が見えない!

第三話「医者の仕事」(前書き)

これはホラーですか？いいえ、これはコメディです。
きっとそのはずで

第三話「医者の仕事」

いままでのあらずじ

教室のドアを開けた先には生首がいました

気がつくと天井には手術室でよくあるデカイライトが見えた。どうやら気絶してしまっていたらしい。

何なんだあの生首は？生首にしては饅頭や大福のようにポツチャリしていて血色も良かった。そしてあの顔。一瞬かわいいと思えてしまった自分が許せない。

で、ここはどこなんだ？

消毒液のおいが充満している室内を見渡していると、ドアを開けて白衣を着た男がカートらしき物を飄々と運んで入ってきた。

「あれ、起きちゃった？」

男は何の緊張感もない声でそう言う。

「はい、起きちゃいました」

私も同じように応えた。

「残念、ぐっすり寝ているから麻酔要らないと思ったんだけどなー」

「何する気だった!？」

カートから一本のメスを取り出して眺めながら言うので思わず叫んでしまった。

「元気がって結構。僕は医者だからね、君を元気にしようとしていたんだ」

「メスもって言われても説得力ない!」

「まあ、そう言うなって。僕は君と同じクラスの仲間なんだ。これから仲良くしていこうじゃないか」

「……?ちよつとまで。お前同じクラスって言ったよな?てことは私と同じ年齢だとして……。お前医療免許どうした？」

「持っていないぞ。だからヤブ医者さ！」

ダメだこいつ、早く何とかしないと。

私がこのヤブ医者をするか悩んでいると、カートを片付けようと外へ出しようとしたヤブ医者が部屋の隅を指差して言った。

「そうだ言い忘れていたが、あいつもクラスメイトだぞ」

ヤブ医者が指差す先にはあの生首饅頭がいた。

「ゆっくりしていつてね！」

青白く丸みを帯びた頭が暗闇に浮かんでいる。手術室にこいつがいるともうホラーにしかない。そしてさりげなく衝撃的なことを言ったヤブ医者は笑いながら部屋を出て行った。

ボタンと部屋が閉まり、私はこの暗闇の中、化け物と二人っきりという最も避けるべき状況の中へと足を踏み入れていた。

……こわい

第三話「医者の仕事」(後書き)

作者自問自答コーナー

Q 何の物語？

A わかりません。逆に教えてほしいです

次回もゆっくりまっついていてね!!

第四話「保健室の中の誰か」(前書き)

シリアスとシュールの区別がつかなくなってきた。
だがこれは言える。
これはカオスだと。

第四話「保健室の中の誰か」

いままでのあらすじ

恐怖体験、饅頭と二人つきり。

私はのんびりとお茶を啜っていた。

カーテンを開けると眩しい光が差し込み部屋を照らす。どうやらここは保健室のようで手術台の周りにいくつか白いシートが清潔感を感じさせるベッドが並んでいた。中央にある手術台は移動式＋折りたたみ式で収納に困らない作りになっていたので部屋の隅に片付けておいた。

私はこの饅頭が淹れてくれたお茶をのんびり外を眺めながら飲んでいた。

「たまにはゆっくりするのもいいな」

「ゆっくりしていつてね！」

饅頭と一緒にお茶をするのもたまにはいいだろう。饅頭といっても生首だけど。

「さて、そろそろ行くか」

そう言つて席を立つたのは三時間目のチャイムが鳴った後だった。今日は午前までしか学校はないのでこのままここにいれば授業に出なくても帰れるのだが、何故いまになって戻ろうと思ったのだろうか。自分の行動に疑問を感じる。

そういえばまだ担任にすら会っていないな。クラスメイトは絶望的だが先生がまともならまだ希望は残っているはずだ。できればクラスメイトも他はまともであつてほしい。外ではなく校内からなにやら怪獣の雄たけびのような音がするが気のせいであつてほしい。

謎の生物がたくさんいる学校だと関心することもできず、忘れ物

がないかもう一度部屋を見渡すと床に一枚の紙切れが落ちていることに気が付いた。

拾ってみると綺麗な筆跡で私宛に何か短いメモのようなものが書かれている。

『ようこそ偽理学園へ。一年五組は君を歓迎するよ。』

ヤブ医者より

偽理学園とはこの学校のこと。一年五組とは私が入ったクラス。

ちよっとおかしな文章だがヤブ医者 of 精一杯の歓迎なのだろうと私は勝手に納得して部屋を出ようとドアに手をかける。

その前にと、私は饅頭にお茶の例を言おうと振り返った。

「お茶ありがとう。おいしかった……？」

言葉を繋げているうちに気づいた。

部屋には私以外誰もいない。あの饅頭の姿が何もなかったように消えていた。

ドアに近づくまでちゃんとそばにいた。窓には鍵がかかっていて開かない。そもそも手のないゆっくりが鍵を開けることもできなかったはずだ。いったいどうやって。

私はそこまで思考し、結論の代わりに一言。

「やっぱりこの学校オカシイ！」

きつとこの学校で起きる非常識で不思議な出来事は全てこの台詞で解決できるだろう。

何も解決できてないけど。

私は叫んだ後部屋を出て教室に向かった。

つづく

第四話「保健室の中の誰か」(後書き)

次回は教室に潜入。

作品内での日にちが異様なほど進まない。

第五話「友達とクラスメイトは選べない」(前書き)

気づいたら半日の出来事だけで四話使ってた。
そろそろ進展があってもいいと思う。

第五話「友達とクラスメイトは選べない」

御札の貼られているドアを潜り抜けるとそこには静かな授業風景画が広がっていた。

先生が静かに私の席を指差す。一番後ろの見晴らしの窓に近い席だ。今日は授業といっても授業の方針などの説明で本格的なことはやらないらしく、先生が自分の趣味などを適当に話している。

そういえば自己紹介の時いなかったからクラスメイトの顔も名前も知らないな。

そう思い辺りを見回していると隣の席の奴と目が合った。

「隣の席だね。これからよろしく」

顔を知っている奴が隣に座っていた。教室なのに白衣を着て怪しげな笑みを浮かばせているヤブ医者がすぐそばにいた。

「お前が隣の席なんて幸先悪いな」

「まあそう言うなって。知り合いは多い方が良いだろ？」

「悪友は別だ」

「僕をただの悪と一緒にされては困るね。僕は極悪だ」

今ここでこいつは友人リストからはずされた。自分で極悪なんていつてる奴にまともな奴はいない。誰でも知っている常識だ。こんな危ない奴と関わりたくない。

「今関わりたくないと思ったかい？」

「！？」

「隠さなくてもいいよ。全て僕にはお見通しだ。調べようとすれば君のトップシークレットまで全て知ることができる。考えていることも例外ではないよ。些細な動作で全てが分かる。まるで手のひらで踊ってるようだね」

ヤブ医者は言いたいことを遠慮なく言ってくる。これはかなり不愉快だ。これを聞き続けるなんて私にはできない。ならばどうするか……。そんなことは決まっている。

「……お前気持ち悪い」

「ぐっ！？いきなり直球だね。これでも結構傷つくんだよ」

ヤブ医者の顔が少し引きつる。

心が読まれるなら素直に言えばいいんだ。そもそもこういうタイプには思ったことをそのまま言っただけやるのが一番なんだ。

「そんな性格してるから友達できないんじゃないのか？」

「ぐをつ！？」

ヤブ医者額の冷や汗が浮かぶ。

「もしかして凶星だったのか？悪いね、適当に言ったことがあったしまった。これで分かったよ。人の過去を読めるのはお前だけじゃないってことが」

「なん……だと……」

見える。私には見える！ヤブ医者体に無数に突き刺さる言葉という槍が！

「まあ冗談はこの辺しといて、ヤブ医者、一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

ヤブ医者は話を変えたとたん何もなかったかのように立ち直っていた。

「やっぱし演技だったかコンチキショー。まあいいや。それよりも……。」

「何かこのクラス見るからに変わってる奴いない？」

少し周りを見ただけで気づいた。あの饅頭を始めとしてモヒカンやメイドや謎の生命体Xなどが席に座っている。もう学校の風景には思えない。

「気のせいだよ」

ヤブ医者は軽くそう返してきた。

どうすんだろ、これ

第五話「友達とクラスメイトは選べない」(後書き)

何故つくつた!?

の意味が次回あかされる、かもしれない

第六話「ロボットの反乱」(前書き)

新しい登場人物が出て、ちょっとした伏線をはってみました。
これで少しは先が見えてきたかな？

第六話「ロボットの反乱」

授業も終わり後は帰るだけなのだが、親は夜逃げのように行方知れずなので帰るのは寂しい。

なんて今更思っわけはない。今日はいろんなことがあったので疲れた。早く帰って寝よう。

私はこの時はまだ気づいてなかった。本当の地獄はこれからだということに。

(ヒュー)

私が学校を出ようとした時だった。後ろで冷たい風が音を立てて吹き去る。

いやな予感がする。漫画やアニメでもこういう風が吹いた後には必ずといっていいほど何かよからぬことが起きる。いわゆる不吉の前触れだ。

後ろを向かないで背中中の神経を敏感にし、後ろを伺ってみた。すると、かすかだが誰かが後ろにいる気配がした。

「誰だ！」

私は一歩間合いを取ってから振り返る。

その一歩が重要だった。私の後ろには凄い勢いでチョップを振り下ろすマッチョマンがいた。風が切れる音が聞こえる。あれに当たったらひとたまりもない。

「何なんだあんたらは」

「いや、ただ虫が付いていたので取ってあげようとしただけです」
マッチョマンははにかんだ笑顔でそう言った。私はそのはにかん

だ笑顔にとび蹴りを喰らわした。

「なんだ、いい人じゃないか。とでも言うと思ったか！確実に殺す気でかかってきてたろ！」

私が戦闘体制に入っていると、マッチョマンの後ろからヤブ医者が出てきた。

「なかなかやるじゃないか」

「何のまねだ？」

「いやー、噂で君の事を聞いたものだからちょっと試してみたくなつたんだよね」

「噂だと？何故そんな……」

入学して二日しか経っていないのにどうして噂なんかされたんだ？まったく身に覚えがない。

「君はだいぶ変わったクラスに入ったからね、注目されてるのは当然のことだよ」

お前も同じクラスだろ。

「それに君は入学式の日から遅刻したり休んだりしてたから只者ではないって思われてるみたいだよ」

「なるほどな。で、何で攻撃してきたんだ？」

「だから、君が普通の人間か試そうと思ったんだ。あつ、紹介遅れたけどこの筋肉の固まりはハルク君だ」

「初めまして、志村ハルクです。先ほどは失礼しました」

「あ、こちらこそよろしく」

ハルクは意外と紳士っぽかった。

何だかんだとコントを続け、もう四時を過ぎた頃にヤブ医者がかきりだした。

「さて、本題に入ろうか」

「本題？」

「ああ、君を試したのは他でもない、ちょっとした事件を解決するため。そのために人手がいるんだ。さっき試したが、君は強い（

はず)。手伝ってくれ」

「いったい事件って……」

(どっかん)

その時だった。後ろから何かが崩れる音と爆破音が聞こえてきた。後ろにある崩れるものっていうと、あれしかないよな。

私が後ろを向くと巨大なロボットが学校を半壊して校庭へ移動していた。

「なんじゃありゃー!?!」

「あれは僕とハルク君達が造ったロボットだ。凄いでしょ」

ヤブ医者がちよつと誇らしげに言う。学校を壊しているロボット
のどこが誇らしいんだ?

「何故つくつた!」

「趣味」

「よし、今から校長室に行って退学して来い」

「酷いこというねー」

ヤブ医者はこんな状況にもかかわらずへらへら笑っている。そのせいで私はこの状況を危険としてしまいち判断できない。ハルクといえは冷や汗をダラダラ流しながら崩れていく学校を絶望的に眺めている。

ハルクの反応を少しでもヤブ医者が真似してくれれば危機的な状況を理解できるのに。

「事件ってのはあれを止めることなんだけど、手伝ってくれる?」

「いやだ!どうやっても私は関係ないだろ!だいたいあんなのどうやって止めるんだ」

「何って、そりゃあ爆弾とか。最近じゃ学校にあるものだけで威力の高い爆弾を作ることば可能だからね」

「じゃあ自分達でやればいいだろ。何故私を」

「おとりにするため」

ロボットの前にこいつをどうにかしなきゃな。

第六話「ロボットの反乱」(後書き)

ダメだ、やっぱり先が見えない。
ネタも無くなってきた。

いや、最初っからないか……

第七話「ロボットの宿命」(前書き)

この物語の行く先と同じくらい人生が不安だ。

第七話「ロボットの宿命」

巨大ロボットが学校を破壊してこちらに近づいてくる。

「なあヤブ医者、少し思ったことを言っていいいか？」

「ああ、いいよ」

「俺たちの後ろって校門だよな。じゃああのロボットが向かってるのって町じゃね？」

この学校は少し町から離れた丘の上に建っているわけだが、このロボットが向かっている先には所々家に光が付き始めた町が広がっている。

「こりゃあちよいとやばいんじゃない？」

「んー、さすがにやばいね。ハルク君、すぐに作戦を開始するよ！」

「で、ですがまだ囷役が決まっていけません」

ハルクが戸惑っているのを見てヤブ医者は即決する。

「君がやればいいじゃないか」

「はい？」

あまりにも非道な決断にハルクは戸惑いを隠せないようだ。まあ私が囷になるわけじゃないからいいか。

「頑張れハルク！」

「あんたら最低だな！」

非道？外道？そんなものは人間として生まれてきたなら持っている当たり前のスキルだ。

「ヤブ医者、作戦って何だ？」

「簡単に言えば落とし穴だね。囷を使って落とし穴に誘い込む。今他のメンバーを使って急速に穴を掘っているから片足を埋めるぐらいの大きさにはなるはずだ。落とし穴にはまってバランスを崩したら一斉に攻撃を開始する」

「でもロボットをハルクなんかで釣れるのか？てか、何のためのロボットだ？」

「あのロボットはある目的のために一定の条件を満たした敵を追いかける機能が付いているんだ。その条件とはずばり、女の子と一緒ににいる男だ！」

なんとなく用途はわかった。たんなるモテない男の僻みだな。

「男はハルクとして女はどうするんだ？」

私はすでに圏外だとして、ヤブ医者が女装するわけないしどうするんだ？

「いやだなーもうそこにいるじゃないか」

ヤブ医者は私の足元を指差した。そこには今日よく縁のある生首兼饅頭がこちらを見上げていた。今日だけでもう見慣れて愛嬌すら感じられる。

「えっと、これ？」

「そうだよ。彼女は『ゆつくり』だ」

「ゆつくりが名前？」

「細かいことはまったくの不明。どこに住んでどこに生息しているのか分からない種族だから仕方なく『ゆつくり』と呼んでいるんだ」

「なるほどね」

もう何でもよくなってきたな。そろそろ私の感覚も末期になってきたのか。

「じゃあ説明も終わったことだし作戦を実行するか」

ロボットは動きが遅いようで助かった。

二十分後

ハルクは顔を真っ青にして校庭を全力疾走していた。さっきまでのろまだったロボットはこれでもかと言うほど身体から蒸気をだしてハルクを追いかけていく。ロボットの標的はあくまでも男なので

ゆつくりはとづくにこちらへ非難している。

「何でこのロボ急に早くなったんですか!？」

「そりゃ遅かったらダメだろ。あと、落とし穴はそっちじゃなくてあっちだよ」

ヤブ医者にはヘラヘラ笑いながらこの喜劇を楽しんでいる。それに加えて嘘の落とし穴の位置を教えて振り回している。

「そろそろ限界かな？」

二十分も全力疾走させられたハルクはもう限界のようでどんどんスピードが落ちていく。

ロボットもオーバーヒートしているようで今にも爆発しそうだ。

「もう落とし穴にはめるのも面倒だしさっき作った手榴弾でいいかな？」

ヤブ医者はそう言うのとポケットからガシャポンのカプセルのような物を取り出した。

「いつの間にそんなものを……。よく作れたな」

「慣れれば簡単だよ。花火の火薬でも作れる。まあこれは水素爆弾だけど」

ヤブ医者はカプセルから出てる針金を引き抜き、ロボットのほうへ投げた。

(ドーン)

カプセルは爆発し、それに連れて今まで無理をして動いていたロボットも爆発した。

校庭の真ん中に火柱と大きな黒煙が立ち上る。

「やっぱりロボットは爆発だよね」

花火を見ているようなヤブ医者を尻目に私はあることに気づいた。

「あそこにハルクいたよね？」

空はすっかり暗くなり、月が美しく輝いていた。

第七話「ロボットの宿命」(後書き)

ようやく二日目が終わりました。
もう七話目なのに。

第八話「計画の誤算」(前書き)

ゆっくりすぎた。

第八話「計画の誤算」

入学して三日目。

何事もなく学校へ行き、何事もなく勉学に励み、何事もなく帰宅する。完璧な今日の計画を立てて学校の門をくぐった。

そこには昨日の爪あとのように校庭に大きな穴が開いていた。学校は工事中の張り紙が至る所に張ってあり今にも崩れそうになっている。だが、それは昨日の名残で今日はまだ何も起きていない。計画は十分に達成可能な領域だ。

黒く焦げたロボの横を通りながらそんなことを考えている私はもう末期なのかも知れないな。

「おはよー」

下駄箱のところで後ろから声が聞こえる。このダレた声は今日の計画の一番の障害になるだろうヤブ医者の声だ。ここで挨拶でもしようなものなら確実に友達と見なされ、これから毎日付きまとわれる。それだけは避けなければ。

それを察したようにヤブ医者は私の前に回りこんで言う。

「もしかして今挨拶したら僕に高校生活をボロボロにされると思ってる？今無視したところで無駄だと思うよ」

察するどころの問題じゃねえ。もうこいつは読心術をマスターしてやがる。

だが、ここは反応してはダメだ。喋らず騒がず他人のふりをしてやり過ごすんだ。

周りの生徒達がなにやら騒がしいがそんなことを気にしてはいけない。下を向いて誰とも目を合わせるな。

「おはようございます」

無視を続けていると突如私に向かって丁寧な挨拶が送られてきた。
「あっ、おはようございます」

先生かと思わず挨拶を返してしまった。よく考えてみたら

私の知っている先生は入学式の時に不穏な台詞を言っ
て私を助けたあの人だけだ。じゃあこの人は一体誰だ？

そう思い顔を上げると二メートル近い顔を包帯で覆ったマツチヨマンが立っていた。この体系をよく思い出してみると、彼は昨日会ったハルクだった。

「おはようハルク君。重症のようだけど大丈夫？」

ヤブ医者面白がりながら挨拶をする。

「あなたのせいで朝から包帯男呼ばわりですよ。どうしてくれるんですか？」

「僕は医者だから治してあげるくらいしかできないな」

「人を容赦なく爆弾で吹き飛ばす人に治せる傷はないと思いますけどね」

「ほう、僕がただの爆弾魔だというのかい？」

「昨日あんなことをされたんだから当たり前です」

「なら僕が本物の医者だということを証明してあげよう」

「望むところです」

「まずは君の傷を治してしんぜよう」

「やれるものならやってみてください」

「よしっ。なら保健室に行こうか」

ヤブ医者はハルクを連れて保健室へと向かって行った。

ハルクはまだ気づいてないのだろうな。自らヤブ医者の実験台に名乗りを上げたことに。

「ゆっ」

教室に入る前にゆっくりと合流した。

「おう、おはよう。ヤブ医者はハルクの付き添いで保健室に行っているから今日は遅れると思うぞ」

「ゆっくりしてたってね！」

「そうだな」

この時すでに饅頭と話ていることに違和感がなくなっていた。むしろゆっくりが凄くまともに思えていた。

計画なんて最初から破算しているものなのだと、後に私は悟った。

第八話「計画の誤算」（後書き）

ゆっくりの挿絵を描きたかった。

第九話「大掃除の始まり」(前書き)

よく鎌を持たされて雑草刈りをやっていた。

後書きにアンケートがありますので、気楽にお答えください。
答えられるものだけでも結構です。

第九話「大掃除の始まり」

教室に入って少し経ってから朝のホームルームが始まった。

「お前らおはよう」

担任の塩谷先生が独特な挨拶をする。朝一番で生徒にお前らと言う先生は結構珍しいんじゃないか？

「今日は大掃除の日となってるから各自割り振られた掃除場所をしっかりと掃除するように。一番掃除を頑張ったチームには理事長から褒美が貰えるぞ。二位のチームには校長からだそうだ。ただし、ビリのチームには厳しい罰ゲームがあるから気をつけるよ。じゃあ頑張れ」

塩谷先生は用件を言い終ると教室を出て行った。

この学校では一学期中に二度大掃除が行われる。先生はクラスを何チームかに分けてそれぞれの指定された掃除場所を割り振る。全て先生がくじやらダーツやらで決めるのでかなりバラバラなチームが出来上がることが多い。一日全部掃除に使う一大イベントとしてこの学校の隠れ名物となっている。

私のチーム

場所 四号館三階空き教室

メンバー 私

ヤブ医者

ハルク（欠席）

紳士っぽい男子生徒

ヤンキー

どう考えても何かの陰謀があるであろうチーム構成になっている。「これからよろしくね」

ヤブ医者が楽しげに言ってくるが、ハルクが欠席していることで

その笑顔が怖い。こいつ、もしかして先生に賄賂でも渡したか？

ハルクが戻ってこないのを不安に思っていると、紳士っぽい男子生徒がこちらに向かってきた。誰だっけこいつ。そろそろクラスメイトの名前ぐらい覚えておかないとな。

「君が噂の……。僕は手塚って言っただ。これからよろしく」
噂の何だ！？

まあ、そんなことはいちいちツツコンでいてもしかたがない。

「さあ気合入れて掃除すんぞ！」

それにしても、ヤンキーが一番気合が入っているのはどうしてだろうか。

この怪しげなメンバーで掃除場所へと向かうことになった。他のチームを見てみてもちよつと変わってるが、まだましのように見える。

どうやらもう大掃除は始まっているようで何人かがすでに廊下掃除を始めていた。邪魔しないようにと慎重に廊下を歩いていると、何やら視線を感じる。

「もしかして私たち目だつてないか？」

「気のせいだよ。視線なんか気にしていたら社会でやっていけないよ」

もしかしてそれはギャグで言っているのか？周りの視線の先にあるのは、お前の着ている血痕のついた白衣なんだが。

目的地に近づくにつれ人氣がなくなっているような気がする。

大掃除は一日中やるので一チームに割り振られた掃除場所はかなり広い。だが、この三階に上がってから人の姿がまったく見当たらないのは不自然だ。

「ここはやばいな」

ボソツと手塚がつぶやく。

「何がやばいんだ？」

「聞いてないか？四号館三階のとある一角には絶対に入ってはいけない話」

「聞いたことないな」

「何でも、入ったら一生出てこれない部屋らしくてさ、今じゃ鎖やら何やらで硬く閉ざされているらしいよ。まあ、かなり間違ってるわっているらしいから気にしなくてもいいだろうね」

「へー、そうなんだ」

そんな話をしている内に掃除場所までやってきた。来る途中に鎖で閉ざされた部屋なんてなかった。

「なんだ、ただのデマか」

私は入学式の時のこともあり少し安心した。

「さあ掃除だ！」

箒を持ったヤンキーが騒いでいる。何なんだこいつは。

第九話「大掃除の始まり」(後書き)

アンケート

Q 1 主人公の性別はどれか。

1 男の子 2 女の子 3 男の娘 4 謎 (D)

Q 2 挿絵は必要か。白黒でもいいか。どのキャラがいいか。

Q 3 好きなキャラは何か。(随時受け付け)

1 ヤブ 2 主人公 3 ハルク 4 ゆっくり 5 その他

Q 4 字の大きさはちょうどいいか

何かありましたら気楽にご質問ください。

第十話『掃除の恐怖・衝撃・関心』（前書き）

話数が二桁になったのでスペシャル！
いつもより長くなっています。

第十話『掃除の恐怖・衝撃・関心』

掃除が始まったわけだが、正直割り振られた範囲を見てやる気になくなっていく。

この人数でこの教室をやればいいんだな。

そう思っていると、ヤブ医者細かいことが書かれた紙を持ってきた。

「どうやら僕らの掃除場所はこの教室を中心に半径三十メートル。つまり廊下、隣の談話室とその隣の和室あたりだそう。この教室が端っこだから長さが倍になったのかな？ 範囲内の窓、壁、ドア、黒板など、全てを細かく掃除するようにだつてさ」

四人だけでは大変な広さだ。せめて箒や雑巾以外にモップがあったら少しは楽になるんだけどな。

「何だつてそんなめんどくさい指定の仕方をするんだ？」

「さあね。入学したばかりの僕には分からないよ。他のチームも同じ指定の仕方なのかいささか疑問だけどね」

ヤンキーや手塚はヤブ医者その返答に納得したが、私は妙に違和感を感じた。

ヤブ医者は何かを知っているように感じてならない。

そもそも昨日のロボットだつてそう。入学して間もないヤブ医者何故あんなロボットを作れたのか。それに、ヤブ医者は当然のように保健室を自由に使っている。ヤブ医者はずっと、あたかもこの学校にずっと居るような行動をしているのだ。

でも今はそんなこと関係ないか。

「じゃあまずどこから掃除していく？」

「僕は和室行ってみよう」

「おしつ、じゃあ行くか」

私が考えているうちに話が進んでいた。まあこいつらが仲よさそ

うでよかった。

和室に入ると独特な匂いが鼻を衝いた。新品の畳の匂いだ。

「広いな」

手塚がつぶやく。

確かに広い。教室の倍近い広さはあるんじゃないだろうか。

「広いが置物とかはないな。シンプルでよかった」

プリントには部屋に置かれている置物もしつかり磨くと書いてある。この部屋には長机が壁に立てかけているだけで他は何もない。

「残念だけど、和室は障子の張替えもしとけと書いてある」

またそんなめんどくさい指示を……。

「あとこの部屋は畳を拭いて、押し入れに座布団があるから干しとけだって。障子の紙と糊も押入れにあるようだね」

「んじゃまずは座布団でも出すかな」

ヤンキーが押入れを開けると、上の段にかなりの量の座布団が重なり合っていた。

「えーと、紙は下の段かな？」

薄暗い下の段をのぞいて見ると、日本人形がたくさん置いてあった。

「……!?!?!」

全員が絶句した。

昔聞いたことがある。人間は本当につらい時や怖いときは声が出ないって。

「……紙はあそこか」

私が動けないでいると、ヤンキーが人形達の横にある紙と糊を取ろうと手を伸ばした。勇気があるな。

「うわっ!」

ヤンキーが急に叫ぶ。

「どどど、どうした!?!」

「手塚、動揺しすぎだ。少し落ち着け」

手塚に深呼吸させていると、ヤンキーが震えている手で日本人形を指差す。

「人形の首が、首がこっちに向いた！」

ヤンキーの顔が青ざめている。

手塚は動揺しながら「そんなバカな」と苦笑いしているが、私は見てしまった。ヤンキーが紙と糊を掴んだ瞬間人形達の首が一斉に千切れんばかりの勢いで振り向いた光景を。

もう一度確認のため除いてみると、人形達は正面を向いていた。

「別に変わらないが」

手塚は震えながらも言うが、本当にそうなのだろうか。私にはさつきとは違い、人形全部がこちらを睨んでいるように見える。

「思っただけど、これも置物だよね？」

ヤブ医者がにやけながら言ってくる。

「「見なかったことにしよう」」

私たち三人の意見は一致して人形は知らなかったことになった。

障子の張替えをしているヤブ医者と手塚より先に畳を拭いていたヤンキーと私は仕事が終わってしまった。障子の張替えを手伝いたいが道具が二人分しかない。

「ヤブ医者、これから私たち談話室の掃除してくるね」

「分かった」

ヤンキーはその外見とは裏腹に率先して掃除をこなしていくので早く終わった。綺麗好きなのかな？

「じゃあ次いくか」

「おうっ」

私たちは隣にある談話室に向かった。

さっきの和室とは違い談話室はごちゃごちゃしていた。

「こりや凄いな」

「ああ、半端ねーな」

談話室の広さは教室より狭いのだが、あちらこちらに壺やら絵画などの装飾品が飾ってある。本物のシャンデリアなんてはじめて見た。部屋の中央にはいかにもアンティークなテーブルとフカフカのソファが設置されている。

「無駄遣いもここまできたら立派だね」

「いつまでも感心しても仕方がない。さつさと掃除始めるぞ」

私が感心していると、ヤンキーは壺を磨き始めた。ちようどいい機会だ。ちよつと聞いてみるか。

私はヤンキーの隣で絵画を拭くことにした。

「そつえばまだ名前聞いてなかったね。ヤンキーはなんて名前なんだ？」

「そのヤンキーってのは俺のあだ名か？」

「呼ばれたくなければ大人しく名前を教えなさい」

ヤンキーは小さく舌打ちしたが壺を磨く手は止まっていなない。

「別に隠してるわけじゃねーよ。俺の名前は三枝信一だ」

「三枝か。私の名前は――」

「別に言わなくてもいいよ。お前の名前は有名だからな」

また私の噂か。まったく誰がそんなことを。

「一つ聞いていい？私の噂って何？誰がそんな噂を流しているんだ？」

私がそう言うと、ヤンキーは驚いたようにこちらを見た。壺を磨く手が止まった。

「お前知らなかったのか！？あれだけ噂になつてゐるのに」

私が何をしつたて言うんだ！

「本人が知らない噂なんてよくあることか。それに関してだが、ちよつと質問していか？」

「質問？」

「お前なんで女なのに男子生徒の服を着ているんだ？」

「は？」

私は三枝が何を言っているのかまったく理解ができなかった。

「まるで私が女のような言い方をするなよ。気持ち悪い」

「やっぱり男だったか。お前のこと女だと思っている奴がいるから『男子の制服を着た女子がいる』って噂が流れたんだよ」

なるほど。どっかのバカがそんな誤解をしたわけか。確かに私は童顔で髪も長い方だが、女に見られるなんて、もう死にたい。

「そう鬱になるなよ。俺みたいにお前が女だって噂に疑問を持つ奴もいるし、ヤブ医者のように女なんて思ってもいない奴だっている」

「そう言われると少しは気持ちがまぎれる。ありがとう」

なんだ、見た目ヤンキーなのにいい奴じゃないか。

「でも気をつけるよ。男なんて狼ばかりだからな。まあ、男のお前に言ってもしょうがないか」

「ハハハ、恐ろしいこと言うなよ」

私はこの先の学校生活が嫌な予感しかしなくなった。

三枝は壺を磨き終えたので移動してアンティークなテーブルを磨き始めた。私は本棚を吹き始めた。

「じゃあもう一つ質問」

「一つだけじゃなかったのかよ。まあいいけどよ」

「何で三枝はそんなに掃除が得意なんだ？」

「……俺はさ、昔は見た目どおりのヤンキーで問題起こしてたんだ。そんな俺でもあこがれる人がいた。その人も俺みたいなヤンキーだったんだけど、どこか違っていったんだ。俺らがたむろって散らかしたゴミを最後に片付けて、俺らがやらかした事件と一緒に謝りにいってくれて、ヤンキーなんて外見だけの人だった」

急に昔話を語りだした三枝を見ると、懐かしく微笑むような顔をしていた。

「そんな人が警察に捕まったんだ。どうやら俺たちがやった事件を一人で背負ったらしい。俺たちは自首しようとしたら、あの人はこう言ったんだ。『お前らの後片付けはこれで最後だ。これからは自分でやれ』ってさ。やっぱりあの人は立派だよ。俺もあの人のようになりたいくて、掃除だけはしっかりやるようにしてるんだ」

私は関心したというよりも感動した。

やっぱりあの見た目変人ばかりのクラスにもまともな人がいるんだな。

話しながらも、大掃除は続いていく。

第十話『掃除の恐怖・衝撃・関心』（後書き）

主人公は『男の娘』に決定しました。

誰も止める人がいないので、カオス要素が追加されました。

ヤッタゼ！（>|<）／

第十一話「人形の呪い」(前書き)

大掃除がホラーな展開になってきた。
何故こうなった！？

第十一話「人形の呪い」

掃除を始めて数時間が経った。

「そろそろ昼飯にするかな」

「ん？もうそんな時間か」

三枝に言われて時計を見ると一時を過ぎていた。

とりあえず和室を掃除しているヤブ医者と手塚を呼びに行くと、何故だか知らないが、二人は押入れにあったはずの人形に囲まれていた。

何この状況。

人形達は囲んでいるというよりも追い詰めているといった感じで、全部が二人の方を向いている。そして心なしか近づいていつているように見える。

そんな状況下、手塚は涙目で震えてヤブ医者は座布団を敷いてお茶を啜っていた。

「ハ、ハハハ。人形遊びして散らかしてんじゃねーよ」

三枝は現実逃避をするように笑いながら言う。無理があるその台詞に手塚は必死で首を振る。ヤブ医者は動じていない。さすがだ。

「さて、そろそろお腹も空いてきたし外へ出ようか」

私たちがどうしたらいいか慌てていると、ヤブ医者が箒を手にした。上がった。

「な、何を……」

それを見て驚いた手塚にヤブ医者は静かに「走れ」と言った。

言った直後に手に持っていた箒を全力で振った。人形が十数体なぎ倒される。続けて休むことなく箒を一閃二閃と振る。人形は壊れ、宙を飛び、悲惨な状態になっていく。

投げ飛ばされた一体が私の足元に振ってきた。

「ヤメロ。ユルサナイ」

足元に落ちた人形はでカタカタと口を動かしてとても低い声そう

言った。

「うわわわわ」

それを見た三枝がその人形を思いっきり蹴り飛ばしす。だが、人形は遠くまで飛ばずに人形の髪の毛が三枝の足に絡みつくと結果となった。

人形は髪の毛を伸ばして足から離れようとせず、這い上がろうとその小さな手を伸ばす。

「は・な・せ！」

三枝は自分の足ごと人形を柱に叩きつけた。人形は木っ端微塵になり床へ散らばる。ちょうどそこへヤブ医者と手塚が走ってきた。

「早くここから出るぞ！」

私たちは迫り来る人形を振り切り和室を出た。

「ちくしょう！なんだったんだ、ありゃあ」

「四号館の五恐怖の一つ『和室の彼女達』だね。噂には聞いていたけど、まさかあんなに沢山いるとは思わなかったよ」

「何で学校にあんな怪しげな人形があるんだよ！」

「第十五代目校長が人形好きだったらしいよ。この学校もかなり古いからそんな人形があってもおかしくないね」

冷静に応えているヤブ医者が不気味だが、どうせ理由を聞いても軽く流されるだけだから放っておこう。それに、こういうことに詳しい奴がいても害になるわけではないしな。

「この部屋はもういいだろ」

結果として散らかってしまったが、罰を受けることぐらいあの人形達と戦うよりかました。

「三枝、足は大丈夫なのか？」

「ああ、少し痛むが大丈夫だ」

私は三枝が足を引きずるように動かしているのが不安に思った。これより先では片足を失った状態で難を逃れるのは難しくなりそうだな。

私は柄でもなく嫌な予感をつぶやいた。

そして自分がこの非平穏な日々慣れてきていることを嘆いた。

昼飯を食べ終え、残りの掃除場所を確認しようと学校の地図を開いた。

「残すところは空き教室だけか。結構時間がかかったな」
複雑な構造をしたこの学校の掃除は大変だ。

「その教室にさっき行ってみたんだが、だいぶ誰も入っていないようではこりが積もっていたな。気をつけたほうがいいぞ。もしかしたらあの人形よりもやばいかもしれねーからな」

「おいおい、少し神経質になりすぎじゃないか？さっきみたいなのがあつちこつちにある学校なんて現実にあるわけじゃないか」
三枝の心配に手塚は苦笑いしながら応えるが、その手は震えている。

「ほこりが積もっているから掃除が大変そうだねー」
ヤブ医者を楽しそうに言う。

「着いたな」

空き教室の前に立った私たちは唾を飲み込んだ。
曇ったドアの窓、寂れたプレート、色あせた古いプリント、ひびの入った壁、そこにある全てが不気味に見えてくる。

中に入るとほこりが舞った。

「ひでえ状況だな」

「いつから使っていないんだろうね」

しばらく教室を眺めた後、私が箒を取り掃除を始めようとすると手塚が手招きをして呼んできた。

「何かおかしくないか？」

「ボロイ以外に何かおかしいことある？」

「広さがおかしいんだよね。和室が広くて談話室が狭いせいで感覚が麻痺っているんだ。外を見てみるとわかるよ」

言われるがままに外を見てみる。適当に見ていると、この教室の

奥行きと先の壁の厚さが食い違っていることに気づいた。この教室の奥に窓一つ分あってもいいくらいのスペースがある。

この厚さ全てが壁つてこともないだろう。じゃあ何だこの厚さは。

私が壁を触ってみると「ビキビキッ」と音を立てて近くにあったひびが伸びていった。

「うわっ」

ひびが天井に届いたとき、教室全体が揺らいだ。

「危ない！」

私揺れに耐えられなく倒れそうになった時、ちょうど天井が崩れ始めた。天井が私めがけて落ちてきたと思うと、三枝が私にタックルして代わりに天井の下敷きになってしまった。

「三枝！」

天井は崩れをとどめることなく三枝と私の間に壁を作り上げていく。

そして私の視界は暗闇へと変わっていった。

第十一話「人形の呪い」(後書き)

次回はラブコメになる？

書いたことないからならないだろうな。

第十二話「大掃除の終わりに光を見た」(前書き)

大掃除は今回で終わり。

夏も終わりなのでホラーな話はこのくらいでいいでしょう。

(自己満足)

第十二話「大掃除の終わりに光を見た」

掃除中にまさかこんなことになるとは。

掃除をしていた教室が崩壊して、私は瓦礫に囲まれた空間で奇跡的に生き延びていた。

「出口が塞がれているな」

突然暗闇から声がした。この声は手塚か。

「手塚、無事なのか？」

私が暗闇に向かって叫んでみると「おう！」と元気な返事が返ってきた。

「真っ暗で何も見えないな。目が慣れるまでじっとしていたほうがいいぞ」

「分かった」

そういったが、私はじっとしている性分ではないので暗闇に瓦礫を投げてみた。

「いたっ。何だ！？」

「どうかしたか？」

「いや、瓦礫でも落ちてきたのか？いたっ」

数回瓦礫を投げて手塚の大体の位置は分かった。目も暗さに慣れたおかげで今の状況を把握することができた。

「どうやら昨日の謎の学校破壊事件の影響で、事件の場所に近かったここが崩れたってわけか。ここも旧校舎に劣らず古いつて聞いたことがあるからな」

手塚がこちらを確認して近づいてきた。つまり、あのロボットをヤブ医者が造らなければこんなことにはならなかったわけだ。アノヤロウ！

「あちらこちらに隙間があるから窒息死はないだろうね。それに、外にはヤブ医者や三枝もいることだからすぐ助けは来るだろう」

手塚はこんな状況でも冷静に推測を述べている。だが、その推測

は欠点が多々ある。まず一つはヤブ医者が素直に助けを呼ぶとは思えない。二つ目は、三枝はこの瓦礫の下に埋まっていることだ。そして最後に、この学校に「すぐに助けが来る」というまともな常識が通用する気がしないってことだ。

「現状は絶望的だ……」

私は大きなため息をついた。この暗い崩壊した閉鎖空間で、ちょっとした怪我から大きな病にかかることはよくあること。だが、一番危険なのは精神異常だ。手塚は見たところポジティブで平気のようだが、気は緩めないほうがいいな。

「暗い閉鎖空間か……」

どうやら手塚も同じことを考えてるらしい。

「だったらやることは一つだな」

手塚がこちらに向きを変え、真面目な顔で私の顔をじっと見た。

「ど、どうした？」

私が嫌な寒気がして引きつりながら聞くと、手塚は少し微笑んでネクタイを外し、Yシャツのボタンを上からゆっくり外しながら言う。

「や・ら・な・い・か」

私はさっき投げた瓦礫の数倍の大きさの瓦礫をさっきの数倍の力で手塚にぶつけた。

『気をつけるよ。男なんて狼ばっかりだからな』

三枝の言っていた言葉が蘇る。本当に最悪な状況だ。

「ん？」

私が頭を抱えていると、手塚は何か気づいたように私の肩を叩いた。

「見てよ。この黒板何かおかしくないか？」

手塚が指差す黒板をじっと見てみると、何も分らない。

「一歩下がって見てみる」

呆れたように手塚が言う。瓦礫だらけの床を転ばないように慎重に一步下がって黒板を再度見てみると、少しだけ違和感を感じた。「この黒板、他の教室の黒板と違って反対側に設置されてないか？」普通の学校の黒板は何故かどれも一定の向きに設置されている。

この学校の黒板だって例外ではなく同じ向きに設置されていた。だが、この黒板だけは違う。何か後ろを隠すように当たり前のように設置されている。

「後ろの奇妙な壁の厚さといい、この黒板といい、何かあるね」
どうやら、手塚の探究心に火をつけてしまったようだ。

「この黒板を外したいんだが、どうやろうか……」
手塚が隣で悩んでいるのを放って置いて、黒板を見てみると、中央に引き戸の取っ手のような窪みを見つけた。うまく目の錯覚を利用して隠されているようだったが、そんなもの私に通用するはずない。

その引き戸を開けてみると、黒板が真つ二つに割れるように開き、壁があるはずの場所に襖が現れた。

「これは……」

ふと、和室での人形のことを思い出す。

「空けないほうがいいな」

そう思っただけで黒板を元に戻そうとした時、すでに手塚の手が襖を開けていた。

「いやー、面白い物を発見したな。中に入ってみる？」

襖の先には本物の暗闇が広がっていた。私は激しく首を横に振る。だが、襖を開けたことによる事実はそのような甘い考えを許してはくれなかった。

襖の先から髪の毛らしき大量の毛の束が襲いかかってきた。横を向いていた手塚は無言で言わずに暗闇へと引き摺り込まれていき、私は何とか逃げ出そうとしたのだが片足をとられた。

「くっ、ここまでか」

私はなんとか近くにあった柱にしがみついていたのだが、髪の毛

の力は想像以上に強く、私の力は限界に近づいていた。

「コッチへオイデ。タノシイコトヲシマシヨウ」

背筋に氷を貼り付けるような声が襖の奥から聞こえてくる。

私が柱から離れようとしたその時、瓦礫を破って誰かが突入してきた。

破れたところから光が差し、髪の毛の力が緩んだ。私はすかさず髪の毛を振り払い光へ走り出す。

「ハルク、無事だったんだな」

私が光の先で見たのは大きな身体で崩れないように瓦礫を支えているハルクだった。

「身体は頑丈なのがとりえなので」

私はこうして大掃除を終えることができた。

今回の犠牲者

三枝信一

手塚変野

両二名は無事救出され、保健室へと運ばれた。その後の詳細は不明。

保健室にはヤブ医者もいたとのことだが、ヤブ医者に事情を聞きに行った取材班二名が行方不明となった。

これ以上に犠牲を出さないために、この事件はこれ以上追及しないことにする。

校内新聞 大掃除事件より

第十二話「大掃除の終わりに光を見た」(後書き)

次回は番外編です。

ゆっくりまっついていてね!!

第13話(小話)「ハードボイルドでいきましょう」(前書き)

誰でも一度は、ウーロン茶や麦茶を使ってハードボイルドを装ったことがあるはず！

第13話（小話）「ハードボイルドでいきましょう」

偽理学園という名の高校には購買、食堂などの定番な売店とは違うちよつと変わった店がある。

その店は第七号館地下一階にある洒落たドアの先にあつた。

『BAYAMAZAKI』

そこは教師から生徒までこの学校の者なら誰でも入れる飲み屋だ。生徒には出さないが教師がたまに来るのでさまざまな種類の酒が置いてある。

教室くらいの広さで明かりは少し暗めに設定されており、落ち着いた雰囲気を楽しめるお店としてちよつとした人気がある。

だが、あまりにも隠れたところにあり知ってる生徒が少ない。

今日もまた、店が静かに開店した。

今日いる店員はマスターである山崎さん、バイトである田中くんの二名だけだ。

学校が始まったばかりということもあつて今日はほとんど客がない。だが、いつも静かなので普段とそれほど変わりはない。

（チリーンチリーン）

店内に流れるBGMが入り口のドアに付いてある鈴の音でかき消される。

「いらつしゃい」

マスターがガラスのコップを拭きながら入ってきた客を見ると、長い髪が特徴の可憐な男子生徒だった。

「おや、あなたは噂の……。いえ、気にしないでください。ただの独り言です」

マスターはカウンター席に腰掛けたその生徒の前に水とお絞りを置いた。

「何か飲みますか？」

「ウーロン茶を」

「かしこまりました」

マスターは曇り一つないコップに氷を三つ入れ、ウーロン茶を注ぎ込む。

「どうぞ」

その生徒はウーロン茶を一口飲みコップを置く。氷がカランと心地よく鳴った。

「……」

マスターは再びコップを拭き始める。

「……ちよつと独り言に付き合ってくださいか？」

「独り言に付き合ってください」とはこの店での隠語のようなものだ。この言葉を使う人は誰しも悩みを抱えており、誰かに伝えにくい状況に陥っている。その悩みを、グチを静かに聞いてくれるのがこのマスター山崎だ。

「実は今日大掃除があつたんです」

その生徒は話を始める。

「入学式からここは不思議なことが多かつたんですけど、今日は特に酷かつたんです。和室にあつた人形が動き出したり、掃除場所が崩壊したり、友人が黒板の後ろに隠されていた襖に引きずり込まれていたり。私、もうわけがわからなくて」

その生徒は頭を抱えるようにうずくまった。そうとう溜め込んでいたようだ。

「……」

「もうこの学校にいられる気がしないんですね」

「……」

「親は旅に出ちゃうし。友達皆他の学校で新しい生活を始めているのに私はまだ立ち止まっているようで」

しばらく黙って聞いていたマスターはコップを別の持ち替えながら言った。

「もう、はじまってますよ」

「えっ？」

「あなたはこの学校に入った時点でもう始まっているんです。自信を持っていいですよ。貴方のご両親が旅に出たように、ご友人が新しい生活を始めたように、貴方もとても個性的な道を歩き出してますから」

マスターは拭いていたコップを置く。

「お茶のおかわりはいりますか？ちょうどおいしいお茶が入ったんですよ」

「あ、はい」

マスターは先ほどの冷たいウーロン茶ではなく温かい緑茶を入れ始めた。

「どうぞ」

マスターがテーブルに置いたのは綺麗な翠色の湯のみに入った、明るい黄緑色をした緑茶だった。

「まだ夜は寒いですから」

その生徒はお茶をゆっくりと啜った。

「おいしい」

その言葉に満足したようにマスターは笑顔を浮かべる。

「お会計は結構ですよ。その代わりと言っては何ですが、この学校を辞めないでくださいね。人がやることで一番いいことは最後までやり遂げること。一番やってはいけないことは途中で投げ出すことです。どうか、この学校を好きになってください」

その生徒は「はい」と呟いた。

「少し喋り過ぎましたね。忘れてください」

マスターは少し恥ずかしそうに言う。

「ありがとうございます。お茶、とってもおいしかったです」
その生徒はそう言って満足そうに店を出て行った。

店に最終下校時刻を告げる『ほたるのひかり』が流れる。

「そろそろ店じまいにするか。山田くん、あがっていいよ」

「お疲れ様です」

客が来ないと感じた山崎さんは後片付けを始める。結局先ほどの可憐な生徒以外今日は誰も来なかった。

「マスター、今日はちよつと多く喋っていましたね」

「ああ、不思議なものだね。あの子と喋っているとつい限度が過ぎてしまう。これからは気をつけるとするよ」

「そうしてください。あまり干渉しすぎるのもよくありませんから」
「そうだね。私達はあるまでも聞き手だからね」

マスターは楽しいことを思い出したように笑いながら、高い位置に設置された小さな窓を見上げる。

「おや、今日は綺麗な月が出ているようだ」

第13話（小話）「ハードボイルドでいきましょう」（後書き）

「ほたるのひかり」を聴きながら読むことをお勧めします。

別に意味はないですが。

第十四話「私は男である」(前書き)

こんなやつつけ仕事で大丈夫か？

第十四話「私は男である」

昼休みに入り、私は放送室を占拠した。

昼の放送で流されていた曲が途中で止まって一部では騒ぎになっているだろう。

だが、ここまでしてまでやらなくてはいけないことが私にはあった。

ヤブ医者 of 協力もあり外からの妨害対策は完璧だ。

これで心置きなくできる。

「こんにちは皆さん。どうも、私だ。昼の放送を一時中止して私の話を聞いてくれ」

そう、私はここに演説をしにきた。

全校生徒に聞いてもらうには放送で流すのが手っ取り早いからな。

「最近私のことで誤解されているようなので、言っておこう」

もうここまで来たならやるしかない。

あの噂。昨日の大掃除で知り、脅威を知ったあの噂。

噂は早めに片付けておかなければ厄介なことになるからな。

だからこそ、こんな強硬手段を使っても言わなきゃいけないんだ。誤解を解かなければならないんだ。

私は深呼吸を一回して、一言言った。

「私は男だ」

その瞬間学校に静寂が訪れた。

そして次の瞬間にこの放送室という密閉空間にいても分かるくらい空気が揺れた。

いや、これは学校全体が揺れたのだ。

「なんだ、これは!？」

私が放送室から出てみると前後左右上下から男のむせび泣く声と

泣き叫ぶ声が聞こえてくる。

「いやー。まさかあんな直球でいくとは思ってなかったよ」
見張りをしていたヤブ医者が出てくる。

「もう少しマイルドに言ってあげればこんなにショックを与えずにすんだのにね。男子生徒の諸君かわいそー」

ヤブ医者は何を言っているんだ？私はそんな重大な発表をした覚えはないのに、そんな大げさに言って。

「ははっ、まあ頑張ることだね」

最後に不穏なことを言ってヤブ医者は去っていった。

「……さて、教室に戻るか」

私は気づいていた。放送室をジャックした自分に何も罰が降らないわけではないと。

教室への帰り道はまさしく地獄絵図だった。

廊下にいた男子生徒が全員ムンクの叫び状態になっていて異界に紛れ込んだ気さえした。

「あ、あれは……」

床に倒れていた一人の男子生徒がこちらに気づいた。気づいてしまった。

それに連なるように次々と私のことに気づいていくムンク達。

「さ、さっきのは嘘ですよ？そうですよね？」

まるでゾンビのように私に近づいてくる。もうこいつらムンクなんじゃない。ゾンビだ。

「嘘だあー」

「嘘と言ってくれえー」

「頼むー」

ゾンビたちは周りの教室から次々と沸いてくる。避けようにも量が多すぎる。

「離せ！足に引っ付くな！」

本物のゾンビのように噛み付いては来ないものの、同じ高校生としてこいつら気持ち悪い。

「嘘だあー」

しがみ付いて来るゾンビ共を蹴飛ばしながら進んでいく。たまに「ああん」と奇妙な悲鳴が聞こえてくる。

必死にもがいていると、隣をゆっくりが跳ねながら通っていった。ゆっくりは私に気づいたようでこっちを向きいつもの良い笑顔で言った。

「ゆっくりして行ってね！」

「こんな状況でゆっくりできるかー！」

叫びながら私は布団から飛び起きた。

「……夢か？」

周りを見れば自分の部屋だった。

「はは、何だ夢かー。ひどい夢だなー」

人はあまりの恐怖を体験すると笑いがこみ上げてくることを知った。

私は布団から出てカーテンを開く。朝日が目にしみるがとても心地がいい。

「さて、学校に行くか」

今日はあの夢のせいで早く起きてしまったのでゆっくりできるな。

学校に着くと担任の塩谷先生がやる気なさそうに歩いていた。

「先生おはようございます」

「ん？ああ、おはよう。今日も可愛いな」

「冗談はやめてくださいよ。私男ですよ？」

「ハハハ、嘘は泥棒の始まりと親に教わらなかったのか？」

「先生も冗談がヘタですねー」

「H A H A H A」

そんなよくある平和な朝の出来事。

後ろでは会話を聞いていた男子生徒がムンクになっていたが。

第十四話「私は男である」(後書き)

世界八大禁忌「夢才子」

第十五話「罰ゲーム」(前書き)

バトルだ。

ついに念願のバトルフラグだ。

第十五話「罰ゲーム」

職員会議を終えて教室に入ってきた塩谷先生に私は呼び出された。
「おい、昨日は何があったか覚えてるか？」

先生に言われて、つい昨日何があったか私は記憶を遡ってみた。

「昨日は、大掃除がありましたね」

そう、昨日は大掃除があった。手塚達と一緒にやったのは覚えている。

「じゃあその大掃除でお前がやらかした事を言ってみろ」

記憶があいまいなのはきつと忘れたい過去があるからだろ。それを嫌にでも思い出させようとするのだから教師は鬼畜だ。

「えっと、大掃除でやったことといえば……」

そう思いながらも思う出だそうとする私はえらいと思う。

「人形をぶち壊しました」

「いや、他にもあるだろ」

私はさらに過去を深く探る。探っていると「ヤブ医者」「崩壊」

「ふすま」「瓦礫」などの単語が浮かび上がってきた。

これをつなぎ合わせると……。

「あつ——」

私は全てを思い出した。

つい昨日の出来事。まだ24時間と経っていない出来事。あれほどの出来事。自分でも忘れるなんてありえないと思えるあの出来事を思い出してしまった。

「ようやく思い出したか」

「……それで私に校舎を壊した責任をとれと？」

私が恐る恐る聞くと、先生は「いや、そうじゃない。責任なんてどうでもいい」と首を横に振った。

「じゃあ何ですか？」

「昨日は大掃除だったろ？お前ら掃除どころか校舎を壊して散らか

したってことで、順位が最下位になったんだ」

「順位って何ですか？」

「昨日言っただろ。『一番掃除を頑張ったチームには理事長から褒美が貰える。二位のチームには校長から。ただし、ビリのチームには厳しい罰ゲームがあるから気をつける』って。だからお前らのチームは最下位となって罰を受けるわけだ」

「そうですか」

「なんだか納得いかないが、決まってしまったことを言うてもしょうがない。」

「で、罰って何をするんです？」

「そう、それなんだが『この町にいる暴走族を葬って来い』だとさ」「は？」

「だから、お前らの力量に合わせて検討した結果このくらいの罰がちょうどいいんじゃないかということになったんだ。ちょうど暴走族が町で暴れてるってことで問題になっていたしちょうどいいだろ？」

「知らねーよ。どう私達五人の力を検討したらそうなるんだ。」

「それ罰ゲーム感覚で決めてません？それも極悪の心を持って」

「ははっ、知らんよ。職員会議はほとんど聞いてないからな。校長あたりが勝手に決めていることだから、逆らっても意味ないだろうしな」

「担任なら止めるよ」

「ああ、あと二位のチームが手助けすることになったぞ」

「私の言葉を軽く流して思い出したように言った。」

「何故二位のチームが？」

「二位のチームは校長からの褒美ってやつだ。あの校長のことだからほぼ強制なんだろうがな」

「褒美って言うよりも嫌がらせですね」

「まあこんな学校に入った自分のせいだと諦めるしかねーな。じゃあ他の奴らにも言っとけよ。心配すんな、頑張ればなんとかなるさ」

用件だけ言つて先生は立ち去つていった。

「……あの先生朝のホームルーム忘れてないか？」

先生は出席すらとらずに出て行つてしまった。

「何か面白そうな話していたね」

いつの間にか後にヤブ医者がいた。とても楽しそうに、嬉しそうに私と先生の話を聞いていた。

あー、こいつなら本当に壊滅できそうだな。

私はため息をついて次の授業の準備に取り掛かった。

第十五話「罰ゲーム」(後書き)

先生出番少ないな。

第十六話「メイドや執事」(前書き)

新たなクラスメイト登場。

「なんだか分からない物語」と同じキャラがいる？
気のせい。

第十六話「メイドや執事」

ヤブ医者が言っていた。

「この学校って普通じゃないと思ってるようだが、それは君の勘違いだ。高校なんてみんなこんなもんだよ。狂人を作り上げ、育て、実戦で使えるようにする。そんなところだ。だが安心していい。世界はそれを正義と言うからな」

それを聞いたとき私は嘘っぱちだと思っていたが、今この光景を見ると本当のことなんじゃないかと思ってしまった。

「何じゃこりゃ」

私の目の前で今、ヤンキーの風貌をした他校の生徒と、今回暴走族討伐を任された私たち十人が壮絶な戦いを繰り広げているのだ。

こうなってしまった原因は少し時間を遡ること四時間前。

土曜日と言うこともあり学校が午前で終了した私たちは、先生から言われていた罰をクリアするために暴走族が集まるとされている廃工場へと向かっていた。

メンバーは十人。

私

ヤブ医者

ハルク

三枝信一

手塚変野

ここまでが罰として来た大掃除組み。

ここからが特別賞として来ることになってしまった大掃除組み

木村木々

今川冴

ゆつくり

和田京成

夜名黄泉

一応クラスメイトの名前と顔は一致するように覚えていた。

おなじみ頭だけのゆつくりがいたことは驚きだが、もう一つ驚いたことがある。和田と夜名のことなのだが、和田が何故か執事服を着ており夜名が何故かメイド服を着ているのだ。初めて教室に入っておかしな奴らがいると思った二人がいる。

それに、彼、彼女が着ている執事服やメイド服をよく見てみると、かすかだが私の着ている学校の制服の名残がある。それこそ「何故つくった」と言いたくなる代物だった。完成度はかなり高い。

木村はいたってまともそうだったが、とても眠そうな顔をして雨が降るわけでもないのに傘を持っている。今川も見えた目はまともで、別にこれと言った特徴もなかった。

だいぶ個性的なメンバーが揃っていると思ったが、まともそうな人たちがいてよかった。メイドとか執事とか医者とか生首饅頭とか普通に考えて沢山いるわけねーよ。沢山いてたまるか。

そんなことを考えている内に着いた廃工場。

同じ町内にあるとはいえ、学校と廃工場は同じ町外れで反対方面にあるため時間がかかった。

その分新しい仲間とワイワイ騒ぎながら来たので、この異様なメンバーにもだいたい馴染んでいた。話をしてみれば結構まともな人たちだった。

木村や今川は別世界に行ったことがあると愉快的ジョークを会話にはさんで皆を笑わせたり、夜名はDS発言で男性陣（手塚を除く）を怯えさせ、和田は全国を歩き回ったことを自慢げに話していた。

「おつ、見えてきたぞ」

三枝が山のふもとにあるいかにも何か出そうな廃工場を指差した。「暴走族が日が昇ってから動き出すとも考えられないし、こちらへ

んで時間を潰すか」

着いてみればまだ四時頃だった。まだ時間がありそうだな。

私たちは持つてきたレジャーシートを広げてピクニック気分で遊び始めた。

暇になるかと思っただが、手塚がバドミントンやらバレーボールやらインディアアカやらを学校のバックからいろいろと取り出すため、暇することはなかった。

そして時間が少し経って二時間後

私たちが遊んでいると、いかにもぐれた集団が廃工場前に集まりだした。

「あれが暴走族か？」

「いや、あれは近くの強羅高校の奴らだね」

「噂には聞いたことがあるな。確か結構な悪名を持っているとか。」

『ハイエナ』だったか？」

「それは昔の名だ。今じゃ『軍勢』と呼ばれている」

「ただの野獣から軍隊にねー。こりゃ何かやばそうだ」

三枝とヤブ医者、手塚がいたってまじめな話をしている横で、私はゆっくりのほっぺを伸ばしたり突っついたりしていた。何か面白い。

今までバラバラにたむろっていた五十人以上はいるであろうその集団が急に整列し始めた。まさに軍隊のように列を作り気をつけの姿勢で背筋を伸ばす。

列の間から誰かが歩いて集団の前に立った。

そしてその前に出てきた人物を見て三枝が一言つぶやく。

「隊長……」

第十六話「メイドや執事」(後書き)

これで登場人物半分は出てきたかな？

第十七話「軍隊のような何か」(前書き)

作者は厨二病にかかった。

第十七話「軍隊のような何か」

「隊長？」

私は三枝の口から出た言葉を繰り返した。

「知り合いか？」

「……」

三枝は押し黙ってしまった。

あの集団の前に立つ男、とうに二十歳はいつているであろう貫禄があり、あの集団を纏めたことがプラスされずさまじいカリスマを感じる。

服装は独特で、集団の奴らが着ているような学ランではなく、茶色くコートのように改造された代物だ。

最近は何服を改造するのが流行っているのだろうか？

「お前ら、今日はよく集まってくれた。俺は心から感謝している」

急にその男が演説のような皆に行き渡る話し方でしゃべり始めた。

「今から言うのは俺からの頼みだ。聞いてくれ」

場が静まり返る。嵐の前兆のように風の音すらも止んだ。

そして隊長と呼ばれた男は口を開けた。

「お前らは一体いつ怒る。殴られた時か、罵倒された時か、大事な物が壊された時か、友人が馬鹿にされた時か、教師に理不尽な説教をされた時か、国が自分たちをのけ者にした時か、世界が自分を必要としない時か、この世の中が気に食わない時か。誰だっけいつだって怒る要素はある。だが、怒っても一人じゃどうしようもない時がある。矛先がとんでもない相手に向かっている時がある。だからだ。だから俺はお前ら呼び出した。俺は今とんでもなく怒っている。この町が、俺たちの愛したこの町がよそ者の奴らに荒らされている。これは俺にとって怒るほどの事だ。だが俺一人で戦うにはあまりにも巨大すぎる相手だ。だからお前らの力が欲しい。相手と対等に、いや圧勝できるほどの力が欲しい。だからお前らの力が欲しい

い！自分の手を見ても。そこに込められている力はどれほどだ？
ここにいる仲間達が集まったその手の強さはどのくらいだ？そうそれだ！それを俺に預けて欲しい！」

その一、二分の演説で全員の目が殺気立った。五十人以上が全員自分の手を見て拳を握り締める。

「答えを聞こう。お前ら、俺に協力してくれるか！」

「「「おう！」「」」

「この町を愛する心で怒りを燃やせるか！」

「「「おう！」「」」

「今お前らにある力の源は何だ！」

「「「地元愛です！」「」」

「今お前らの敵はだれだ！」

「「「愛する土地を汚す者です！」「」」

「俺は誓おう！ここに在る力を無駄なく全てを余すことなく使うと！」

「「「俺たちは誓います。己の力を有効に使える者に託すと！」「」」
まるで宗教のようで、それにしてもは気高く一人一人に自我がありバラバラだ。バラバラの意思を持っているのに統一されている。これじゃあ本当に軍隊じゃないか。

「やばいなあいつら。あいつらは敵に回したくないな」

ヤブ医者が隣でつぶやく。

ヤブ医者がこんなことを言うなんて意外だ。意外なほどあの集団が危ないのかもしれないが。

「ところでだ。その茂みに隠れているのは誰だ」

隊長と呼ばれた男がこちらに向いて言う。その声に合わせて集団全体がこちらを向く。

「ちっ、バレたか」

手塚が逃げる体制をとろうとしたが、それよりも早く三枝が茂みから出て行った。

「三枝！」

私は止めようとしたがすでに遅かった。

「お前は……」

「お久しぶりです。隊長」

二人は向き合った。元仲間としての二人が。

「懐かしい顔だな。元気になっていたか？」

「おかげさまで今ではまっとうな生活をおくらせてもらっています」
人形やロボットが暴れている生活がまっとうなのか？

「その制服は……、あの学校に入ったのか」
隊長と呼ばれる男は怪訝そうな顔をする。

「ならその茂みにまだ隠れている奴らと同じ学校の奴らだろうな」
何者だ、あの男。素人の私にも分かる。あの男はずば抜けて危なく才能のある奴だと。ただの高校生にはとてもじゃないが思えない。
「しょうがない。出て行くか」

そう言ってヤブ医者たちは立ち上がった。その顔はやけに楽しそうだ。

「こんにちは、隊長さん」

ヤブ医者が深々とわざとらしくお辞儀をすると、隊長は「はっ」と鼻で笑った。

「偽理高校の亡霊がこんなところに何の用だ？」

『亡霊』私はこの言葉に少し引かれた。それはひょっとしてヤブ医者のことなのか？それとも私たち全員のことなのか？

私がそんな事を考えているとヤブ医者は言った。

「そんな殺気立たないでくださいよ。僕たちはただ戦争をしに来ただけですから」

第十七話「軍隊のような何か」(後書き)

厨二病状態で書いた結果がこれだよ！
こうして黒歴史に新たなページが加わった。

第十八話「話をしよう」（前書き）

話し合いで解決するボスがいってもいいと思うんだ。

第十八話「話をしよう」

話をしたい。とりあえず話を聞いて欲しい。話し合いで解決するべきだ。暴力はいけなと思う。

そんな平和主義の意思を吹き飛ばすような言葉「戦争をしに来た」をやブ医者 は軽々と言い放った。

「ほう、誰と戦争しにきたって？」

「ははっ。分かってるでしょ？言わせないでくださいよ」

「俺は馬鹿だから言ってもらわないと分からんよ、と言いたいところだが、この町に住んでいる者にとって今の敵は一つだな」

ヤブ医者 の挑発的な言葉に隊長は冷静に対応しているように見えるが、言葉の一つ一つが尖っている。

「だが、あいつらは俺たちの獲物だ。大人しく引き下がってもらおう」

その言葉にヤブ医者 は一瞬驚いた顔をした。そして本当に楽しそうに満面の狂気染みた笑顔になった。

「あなたは本当に馬鹿なようですね。僕たちの敵が誰だか本当に分かっているようだ」

「な！？」

後ろにいたヤンキー達 がこたらを睨み付ける。どの顔も痛いほどの殺気を込めているが、それでもヤブ医者 は顔色一つ変えない。

「僕たちの敵は一つじゃないんですよ。そして今倒すべき相手は二つ。暴走族と、あなた達です」

「ほう。俺たちが敵？何故だ？」

「目の前にいるからです」

それ答えになってないぞ。

「お前たちが俺たちを倒すことができるんです？」

「できるんじゃないんですかね。あなた達弱そうだし」

「……」

「と言うわけです。獲物はあなた達のものじゃあない。獲物があなた達なんです」

「後悔するなよ」

「後悔なんてしてばかりですよ」

どうしよう。話がまったくついていけない。そもそもヤブ医者の言っていることがここに来た目的とずいぶん違う。私達はこの戦争に来たわけではないし、隊長達を敵にしに来たわけでもない。なのにどうしてこんなことをヤブ医者は言うのだろうか。

「どういふつもりだ。ヤブ医者」

「どうもこうも僕は最初からこのために来たんだよ」

「お前あの人たちと戦いたくないって言ってたじゃないか」

「確かにできるだけ戦いたくないが、どうせ戦うことになるんだから仕方がない」

ヤブ医者 of 言葉は話がつながっている様してあるが内容は空っぽだった。

「どうせ戦うことになるってどういふことだ？」

「そのうち分かるよ」

なんだかなあ。考えるのめんどくさくなってきたな。

「……仕方がない。戦いに行くか」

隣で三枝が靴紐を結びながら言う。

「三枝。あの人お前の元恩人じゃないのか？」

「確かにそうだが、いくら恩人でも敵になってしまったなら戦うしかないだろ。ここで迷っていてもあの人に迷惑だ。隊長は優柔不断が嫌いだからね」

優柔不断が嫌い。まあそんな気がしてはいたな。しかしこいつもずいぶんと割り切った言い方をするんだな。普通じゃそんな簡単に恩人を敵に回すなんてないと思うんだが。

「話は終わった？」

「なんだかめんどくさい事になってるね」

後ろでピクニックを続けていた木村達がこちらの様子を伺う。今

の状況を見てもそれほど驚くそぶりを見せない。

「たまにはこういったバトルもいいかもしれないな」

「たまにはって、喧嘩はあまり感心できませんけどね」

和田と夜名もこちらに近づいてくる。メイドや執事は服装的に異彩だが、この狂った状況なら別段不自然ではなかった。まあ狂った状況はこの学校に入ってから常にそうなのだが。

「面倒だから俺寝ていいか？」

「殴るわよ」

普通に見えていた今川さんがメリケンサックを取り出して武装をし始めた。木村は普通の傘を取り出して刀のようにベルトに挟んだ。

「木村。それかっこ悪い」

「それを言うな。俺だってまともな武器が欲しいよ」

かっこ悪いのは傘をベルトに挟んでいることなんだが、まあこれ以上言ったら傷つくだろうし、そつとしいてやろう。

「さて、準備はできたか？」

工場前の元駐車場。コンクリートがところどころ剥がれ、雑草が逞しく生えてきている。足場にするには少々荒れているが、この位なら許容範囲だ。

西に『軍勢』が列をつくっている。北に私達が適当に並んでいる。状況は整ったような雰囲気。

本当の敵は暴走族。前座はこの町の学校二つがぶつかる壮大かつ意味が分からなくておそらく意味のない戦争。

「さて、私は観戦でもするか」

荒れたコンクリートにレジャーシートを広げても痛いので、私は横にある草木の開けた所にシートを敷いて座った。

「ゆっくりしていつてね！」

ふと気づくと隣にゆっくりが座っている。

「やっぱりその声を聞くと落ち着くな」

私はゆっくりを膝の上に乗せた。やはり弾力がありなかないい抱き心地だ。

そつだな最大限ゆっくりすることにしよう。

私がゆっくりくつろぎ始めた目の前で、戦は始まった。

第十八話「話をしよう」（後書き）

次回はバトル！

まともなバトルになることを期待だ！

第十九話「喧嘩しようぜ！」（前書き）

バトル。いいえ、ケファイアです。

第十九話「喧嘩しようぜ！」

戦いは激しく火花を散らしていた。

ハルクの拳と敵の鉄パイプが激突し、火花が散る。メイドの持つペーパーナイフが敵の釘バットと交じり合い、火花が散る。執事は敵を投げ飛ばし、木村は傘で無双している。今川さんはメリケンサックで敵を過剰に攻撃して、ヤブ医者にはチェーンソウを振り回している。

この世の者とは思えない戦い方をしているクラスメイトを遠く感じる。

だが、敵の方もなかなかしぶとい。

投げ飛ばされようと、素早く陣形を整えて攻めている。

この軍勢がとっている陣形は、その人数を利用してこちら六人を分裂させるようにこちら一人につき敵五人以上で囲むものだ。

「くそつ。やりづらいな」

ハルクが苦い顔をする。彼は十人に囲まれながら戦っている。おそらく六人の中で一番の実力者だと思われたのだろう。

だが、それは間違いだ。

この六人の中で一番厄介なのは言うまでもなく「ヤブ医者」だ。ヤブ医者の前ではハルクはただの実験材料に過ぎない。ヤブ医者の戦いを見ていればそれを理解いただけるだろう。

チェーンソウを振り回しているヤブ医者に、誰も近づけないでいるのだから。

「ヒヤッハアアアア」

本当に楽しそうに何の迷いもなく楽しそうに振り回している。囲んでいた敵六人が涙目で逃げる。この血も涙も無い男こそがこの六人で最もヤバイ。

おや？似たように、誰も近づけないでいる奴がいるな。こちらでは五人が戸惑って誰も近づけないでいるようだ。

五人が囲んでいるのは今川さんだった。彼女は六人いた内の一人に馬乗りになってメリケンサックを装備した拳を絶えることなく振り下ろしている。

目も背けなくなるような惨劇を目の前に残された五人は恐怖で動けない。

今川さんが拳を止めた。拳と顔には返り血がこびりついている。

「次は誰？」

その言葉に他の五人が蜘蛛を散らすように逃げていく。

しかし、この場に逃げ場など無い。逃げ出した五人は近くで戦っているメイドと執事の攻撃に巻き込まれて倒れていった。

バトル展開？フェアプレイ？そんなのこのクラスに求めちゃいけない。

私はしみじみそれを実感した。

「なあ、あんたは戦わないのか？」

隣でお茶を飲んでくつろいでいる隊長がたずねてくる。

「私は非戦闘員なんですよ。あなたこそいいんですか？こんなところにくつろいで」

「俺も基本非戦闘員だからな。昔から殴り合いとか嫌いなんだよ。

こんな華もねえ喧嘩に参加する気は無い」

「こんなヤンキーの上に立つ人には合わない台詞ですね」

「うるせー。おめーだってあんな連中とだいぶ合ってねーぞ」

「そんなこと自分が一番自覚していますよ。それを言うなら三枝だつて合わないじゃないですか。彼だつてこの面子じゃかなりまともですよ」

私の言葉に隊長の顔が渋くなる。

「そうか、お前はまだ気づいていないのか。奴はあの面子に十分な理由があるんだよ」

三枝の方を見てみると、六人相手にボロボロになりながら殴り合っている。どう見ても普通の人だ。

「今は分からなくていい。それよりも、その隣でゆっくりしている

生物はなんだ？饅頭のような生首のような……」

「ああ。『ゆつくり』って言うんですよ。私の友達です」

「ゆつくりしてたってね！」

「……ふっ。あいつらよりも、こいつの方がよっぽどの学校にあってるな」

そう言っで隊長はゆつくりの頭を撫でた。

「さて、もう決着も着いた。停戦協定に入ろう」

第十九話「喧嘩しようぜ！」（後書き）

久しぶりに小説書いた結果がこれだよ！

第二十話「高校は生活委員でした」(前書き)

そろそろ東方とかボカロとか出してもいいと思う。

第二十話「高校は生活委員でした」

昨日近場の高校と何故か喧嘩をしてさんざん相手側をなぶった後不条理な停戦協定を結ばせた。条約の内容はあの一体をこれから私達の高校の監視下に置くというものだった。あと慰謝料でかつ上げまがいのことをヤブ医者がやっていた。どこのやくざだよ。

問題の暴走族は昨日はこなかった。本当になんのためにあそこ行っただろうね私達。

朝、目が焼きつくような眩しい日差しを覚悟してカーテンを開けると雨が降っていた。

「テンション下がるわー」

ふと下を見ると家の前に誰かが立っていることに気づいた。雨が降っているでその人は黒い傘を差している。かすかに見える服はスーツのようでしたわ一つ無くシャキツとしていた。見るからに怪しい。

「警察に通報しようかな」

そう思っていると、その人は雨に濡れるのを躊躇わないような機敏な動きでこちらを向いた。目と目が合う。瞬間に私は携帯で警察に通報した。

不審者は私の冷静な判断により警察に連行されていった。

「ってなことがあったんだよね」

「最近は随分と物騒なんだね。暴走族も活動範囲を広げようとしていって噂もあるからね。この町はどうなっていくんだろう」

学校に来てハルクに話してみると、ハルクが不安そうな顔をする。まともな反応だ。

だが、私に言わせればこの学校より不安な場所はない。

「ゆつくり警戒していつてね！」

「うん、そうする」

今ではすっかり違和感はなくなったが、二メートルを軽く超える今にも破れそうな学生服を着た巨人と生首のような饅頭と仲良く話している私はきつと特別な存在なのだろう。

「静かに急いで席につけー」

私が学校に着て十五分経ってようやく先生がやってきた。

「最近町が非常に荒れているらしいので気を付けるように。それと今日の六時間目のホームルームは係や委員会を決めますから何がやりたいか決めておくように。以上」

先生は要件をさっさと行って教室を出て行った。

ここで私は思考する。どうやればあのヤブ医者と一緒に係になることができるのかを。ヤブ医者の場合面白さを重視するだろうから、なるべく面白みのない係を選ぶことが優先だな。

とは言っても、私から見て係なんてどれも面倒くさそうでつまらなそうだ。

「係何にするか決めたか？」

頭を抱えて悩んでいると手塚が話しかけてきた。

ここで私はあるアイデアを思いつく。

知り合いを誘って係の定員をいっぱいになればヤブ医者は入ってこれないんじゃないか？

この数日で顔見知りはいくらかできた。係なんて最大で三・四人くらいしか入れないだろうから集めるのは余裕だろう。

「手塚君。もしよかったら一緒に係にならない？」

「もちろんさ（キリッ）」

こいつちよろいわ。

無事一人目を確保した。あとはハルクとゆつくり、それから……。

「なにやってるん？」

飛んで火にいる夏の虫。木村がやってきた。

「木村君。一緒に係にならない？」

「何の係になるん？」

私としては係なんてどうでもいい。重要なのはヤブ医者と離れることだ。

「んーなでもいいんだよね。そうだ。私動物好きだから飼育委員にでもなるのかな」

本当は動物好きでもないんだが、たまたま思いついたので言ってみた。すると、周りの顔色が変わる。

「悪い。飼育委員はパスで」

木村が青ざめてながら言う。

「あつ、僕も他にやりたい委員会があるから」

そう言って手塚もその場を離れて行った。

頭の芯に危機感が呼びかけてる。飼育委員はヤブ医者と同じくらいやばいにおいがする。

「なあハルク。飼育委員って、教室にある植物とか育てるだけだよ
ね」

「そうじゃないのか？あとは学校で飼っている動物の世話とか」

ああ、なるほど。この学校のことだからライオンでも飼っている
うだしな。そりゃ皆やりたがらないよな！。

よし、飼育委員だけは絶対に避けるぞ。

第二十話「高校は生活委員でした」(後書き)

信じられるか？

二十話までやってまだ四月なんだぜ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1326m/>

何故つくった！？

2011年3月29日20時55分発行